

鳥根の記憶

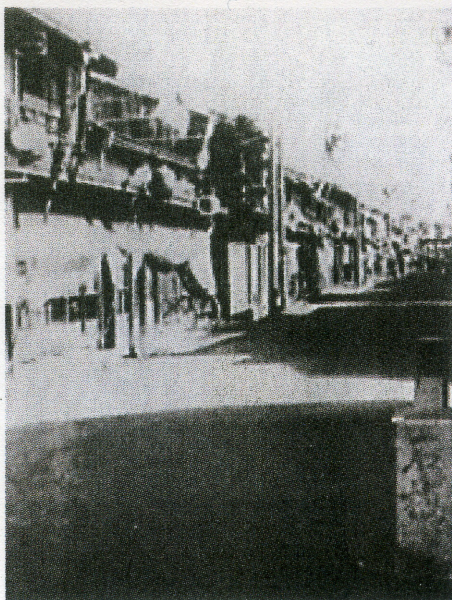
⑧

写真右下の親柱に目を凝らすと、「石橋」と読める。親柱からは欄干が延び、どまやらの橋の名残のようだ。これが、かつて職人町として栄えた松江石橋町の命名の由来らしい。

道路沿いにずらりと店の軒先が並ぶ。松江城をすぐ南に臨み、東西に走るこの街道は、城下町から美保関方面に向かうハメインストリートでもあった。

「質屋に大工、床屋、造り

「石橋」と読める親柱の立つ街道（若松 秀俊・東京医科歯科大学大学院教授提供）



松江・石橋町

酒屋、お茶屋、げた屋、しょうゆ屋、左官屋、おけ屋、灰屋……。昔はにぎやかでしたかねえ、すっかり様変わりしてしまっただ。

往来を北に入った場所に住む城北地区町内会連合会長、綿貫勉さん(84)が、軒を連ねていた店の数々をそらんじた。

自宅は一九三二年(昭和六年)まで製糸工場を営んでいた。江戸時代に掘った井戸が近くにあり、タンク代わりに重ねた酒だるから、竹を四十五十片つないで工場に送水し、まゆを煮た。ポンプアップして今も飲み水に使っている。「この辺りにはいい水脈が走ってますから、造り酒屋やしょうゆ屋さんなどがずいぶん栄えた」

街道のにぎわいが遠のくにつれ、下町は閑静な住宅街へ、石橋の姿も変わっていった。地元の人たちの話では、元々奥谷川に石でふたをした橋で、南北にひざの高さほどの

片側に残る低い欄干と土台が面影を伝える



欄干と親柱があったが、道路整備と同川の暗きよ化で南側の欄干と親柱の土台を残すのみ。柱の行方は知れない。

近くの舟越徳勇さん(74)は「川はもっと広く、深く、子供のころはフナが泳いでいた。その昔は、船が米を運んでいたそうです」と振り返る。

石橋のあった場所から路地を入った先にも、井戸と地蔵のほらがある。住人らが大切にまつり、水脈の恵みも枯れないでいる。

欄干に街道の面影